# いつかまた逢える

脚本●水橋文美江　ノベライズ●田村　章

いつかまた逢える

1995年10月1日初版第1刷

脚本／水橋文美江

ノベライズ／田村　章

発行人／村上光一

発行所／株式会社フジテレビ出版

発売／株式会社扶桑社
〒105東京都港区海岸1丁目15番1号
TEL.03(5403)8888

印刷・製本／廣済堂印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本は扶桑社販売部(書籍)までお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

©1995 (株)フジテレビ出版
Printed in Japan
ISBN4-594-01805-X

# いつかまた逢える

この物語は
ドラマ「いつかまた逢える」のシナリオを元に
小説化したものです。
小説化にあたり、内容には
若干の変更と創作が加えられておりますことを
ご了承ください。

## C A S T

紺野伸一—福山雅治
城崎つゆ美—桜井幸子
中田乾三—今田耕司
今中純子—大塚寧々
荒木勝利—椎名桔平

●

大沢恵子—高島礼子
岡野渉—春田純一
山科明美—西田尚美
森下美智子—小林千香子
川上忍—吉田真由子

●

河野孝一郎—沖田浩之
井原敏行—三ツ木清隆
紺野一郎—河原崎長一郎

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

## TV-STAFF

脚本—水橋文美江

プロデュース—大多　亮／小岩井宏悦
演出—永山耕三／中江　功

音楽—日向敏文（アルファミュージック）

主題歌—『あなただけを～Summer Heartbreak～』
サザンオールスターズ（ビクタータイシタレーベル）

## PUBLISHING-STAFF

プロデュース—星野俊明

ノベライズ—田村　章

カバーイラスト—松本孝志

アートディレクション—成田郁弘

デザイン—デザイン・ファクトリー・ＩＮ

制作—企画室ゆう

編集—石塚覚子

# 1

東京から、約九百キロ。

アメリカあたりなら「それがどうした」と言われてしまいそうな距離かもしれない。だが、こうして東京に暮らしながら、あらためて故郷の島根県との距離を思うと、ずいぶん遠くまで来てしまった、という感慨にとらわれる。高校時代の仲間とひさしぶりに会っているときには、特に。

その感慨にプラスして、しゃぶしゃぶを奢ってもらったことが、負い目になった。

「俺が意味なく男に奢るわけないだろ。ちょっと頼みたいことがあるんだよ」

荒木勝利はクールに言った。高校時代からどこか計算高いところのある男だったが、卒業後八年がたち、一流商社の日興物産で鍛えられたのか、そのあたりはますます強くなっている。

「……そんなことだろうと思った」

紺野伸一は、やれやれ、とため息をついてうなずいた。

「俺の代わりに、縁談を断ってほしいんだ。会社の上司の持ってきた話だから、いちおう会うだけは会わないと格好つかないんだけど、ほら、向こうにその気になられちゃ面倒だからさ」

「俺なら向こうがその気にならないってのか？」
「ま、適当に頼むわ。コンサートのチケット、送っとくから。見合い相手は隣の席に座ることになってるから」
「どんなコなんだ？」
「大沢恵子っていう名前しか知らない。俺もまだ写真も見たことないから」
「適当だよなあ、おまえも」
ぶつくさ言いながらも、断れない。頼まれると嫌と言えない性格に、三流編集プロダクション勤務のせいでいっそう磨きがかかってしまっている。純朴なお人よしという島根県の県民性の典型のような男なのだ。
しかたなく、伸一はコンサート会場に向かった。断りの言葉を心の中でつぶやきながらリハーサルする。なるべく事務的に伝えるために、わざわざ黒縁メガネも買った。だが、もしも相手の女性が泣いたりしたらどうしよう、泣くだけならいい、騒ぎだしたら、どうフォローすればいいんだ……。
だが、そのリハーサルの必要はなかった。隣の席にやってきたのは、赤いマニキュアに赤いハイヒールのケバい女。伸一の顔を見るなり、「恵子は来ないよ」とそっけなく言って、「親の勧める奴なんて相手にしないってさ」と伸一をバカにしたように笑う。要するに、見合い相手

も縁談を断る代理人をよこしていたのだ。
「どこの誰だか知んないけどさ、あんたも男なら、上司が勧めたからって一度も会ったことのないコを相手にするもんじゃないよ」
代理人はそう言い捨てて、最後に伸一をちらりと見た。
そのときだった。
伸一は怪訝そうに腰を浮かせた。
「ちょっと……」
「はい？」と彼女は素直に振り返りかけ、あわてて「なんだよ」と声に凄みを利かせる。
「もしかして、どこかで会ったこと……」
伸一が首をひねりながら言うと、彼女はムッとした顔になった。
「そういう古い手を使って、あたしで間に合わせようって気？　そんなに結婚焦ってるの？　飢えてるの？　冗談じゃないよ」
「ち、違うよ、そうじゃなくて」
「あばよ」
「いや、ちょっと待って……」
「悔いのない恋愛しろよ」

そう言って彼女は立ち去った。実は履き慣れていないのか、ハイヒールの踵を妙に気にしている。伸一はまだ首をひねったまま、彼女の後ろ姿を見送る。どこかで会ったことがある。それは嘘やナンパの口実ではない。確かに、彼女とどこかで、かなり昔に会ったことがある。

彼女がシートに忘れていった派手なイヤリングに気づいたとき、やっと記憶がつながった。

城崎つゆ美――。高校時代の、二年後輩だ。

九百キロの距離と、卒業以来八年という時間を隔てた、思いもよらぬ再会だった。

ずいぶん変わったんだな、とイヤリングを拾い上げ、ため息をついた。伸一の記憶の中の彼女は、もっと清楚で、おとなしいタイプの少女だった。

伸一はイヤリングをポケットにしまった。

いつまでも、あの頃のままでいるわけがないもんな……。

寂しさを当然の理屈で納得させた。

☆

それまでとりたてて意識してはいなかったことが、ひとつのささいな出来事をきっかけにして、急に自分の生活に入り込んでくることがある。

伸一にとっての〝高校時代〟も、そのパターンだった。

つゆ美との一方的な再会の数日後、高校の同窓会が開かれた。学年の枠を取り外して、東京

に出てきている同窓生全員が集まるパーティーだ。
「アッちゃんや伸ちゃんも行くやろ？　俺、三人して行くって約束したで」
連絡をしてきた幹事に勝手に出席の返事を出したのは、同じ剣道部だった中田乾三。大阪の芸大を出て、いまは紳士服店で働いている。
「調子いいことばかり言うんだからな、おまえは」
伸一はあきれながら言った。乾三は、昔からそういう奴だ。調子のいいことばかり言ったりやったりして、あとで後悔してしまうタイプ。ついこの前も、社員旅行で同僚の山科明美とヤってしまい、それ以来明美にまとわりつかれて困っているのだと、伸一と勝利にグチをこぼしたばかりだった。
「幹事が今中純子やからな。覚えとるやろ、伸ちゃんも。クラス委員の、オカッパ頭の、ニキビ面。約束すっぽかしたら、あいつ怒るで。怒ると無茶苦茶怖いの、忘れたか？」
「……おまえも、いいかげん高校時代のイメージから離れろよな。卒業してから八年だぜ、二十六歳でオカッパ頭のニキビ面なわけないだろうが」と勝利。
「まあ、とにかく、頼むわ。みんなで行こう。な？」
やれやれ、と伸一と勝利は顔を見合わせて、苦笑いを浮かべた。秀才でクールな勝利、お調子者の乾三、間に挟まれて損ばかりする伸一。高校時代の役回りは、社会に出てからも変わら


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ないものなのだ。
「わかったよ、たまには乾三の顔を立ててやるよ」と勝利。
「一生、恩に着せる気やな？」と乾三。
あたりまえだろ、と伸一も横からうなずき、冗談めかして言った。
「今中純子だって、昔とは全然イメージの違うコになってるかもしれないぜ」
たとえば城崎つゆ美のように……と、これは心の中だけで付け加える。
純子はテニス部だった。ということは、後輩のつゆ美が来ている可能性もある。もちろん、再会したといって、そこからなにかが始まるわけではないのだけれど。
「まあ……期待するだけ無駄や思うけどな、俺は」
乾三は軽く笑い飛ばした。
だが……。
三日後、同窓会の会場に足を踏み入れるなり、乾三は絶叫した。
「会いたかったで、純子！」
伸一の予想どおり、純子は、高校時代のイメージとはまるで別人の都会派の美女へと変貌を遂げていたのだった。
☆

つゆ美が、いた。この前会ったときとは対照的な、つまり高校時代そのままの清楚な印象で、会場の隅にたたずんでいた。
伸一は恩師への挨拶もそこそこに、つゆ美に近づいていった。
つゆ美も誰かを探しているようだった。
俺……？
伸一は一瞬思いかけて、そんなことあるわけないだろバカ、と自分で自分を笑った。
声をかける寸前、つゆ美の視線が一点に止まった。
その先に、談笑している勝利がいる。
伸一はそっと勝利たちのグループに戻り、小声で訊いた。
「おい、おまえ城崎つゆ美って知ってたっけ？」
勝利はきょとんとした顔で聞き返した。
「城崎つゆ美？　誰だ？　それ」
「俺らの二年下で、テニス部だったんだけど」伸一は小さく背後に顎をしゃくった。「おまえのこと、さっきからずっと見てるぞ」
「え？」
勝利が振り向くと、つゆ美はドキッとしたように一歩あとずさり、会釈を返してきた。

「誰だか知らないけど、壁の花にしとくにはもったいないな。二次会、誘ってみるか」
勝利はそう言って、さっそくつゆ美に歩み寄った。そういうところのフットワークのよさは天下一品だ。ついでに、逃げ足の速さも。
「こんばんは、一人なの？」
にこやかに笑いながら、訊く。
つゆ美は顔を真っ赤にして、「はい」とうなずく。
「テニス部だった城崎つゆ美ちゃんだよね」
「はい！」
つゆ美は嬉しそうにうなずいて、「剣道部のキャプテンだった荒木さんですよね」と言った。
「あ、そうだけど……」
「おひさしぶりです。お元気でしたか？」
「あ、ああ……君も元気だった？」
勝利はさりげなくつゆ美から目をそらして、ハハッと笑った。つゆ美は感激に目を輝かせている。
少し離れた場所から、伸一はそんな二人を見つめた。
事情は、なんとなくのみ込めた。

要するに、勝利は、つゆ美の高校時代の憧れの先輩だったのだ。
そういうことか、と伸一はウイスキーの水割りを啜る。
おいしいところは、いつも勝利が独り占め。高校時代のパターンは、八年たってもなにひとつ変わってはいないようだった。
しょうがねえな、と乾三を探すと、乾三は果敢に純子にアタックをつづけている。
結局、俺はただの引率者ってことか……。

☆

二次会でも、伸一は引率者のままだった。乾三は純子とすっかり意気投合して校歌を歌い始め、勝利とつゆ美も楽しそうに高校時代の思い出を話している。とても会話に入り込めるような雰囲気ではなかった。
伸一がようやくつゆ美と二人きりになったのは、帰りのタクシーの中だった。上京以来ずっと横浜の叔母さんの家に居候していたつゆ美は、つい最近、伸一と同じ町に引っ越してきて念願の一人暮らしを始めたのだという。
だが、その偶然を喜ぶことすら、伸一にはできない。
車の中でツーショットになれても、つゆ美は感激の余韻にひたるように「荒木さん、商社マンだったんだあ……」と勝利の名刺を見つめてつぶやく。

伸一は、ため息交じりに言った。
「どっちがほんと？」
「え？」
「今日の君と、この前の君」
「この前って……」
ごまかしているのではなかった。つゆ美は伸一と会ったことをまったく覚えていなかった。
「悔いのない恋愛をしろよ」伸一は声色をつくって言った。「あばよ」
それでようやく、つゆ美は思い出してくれた。
「あのときの？」
「そう、俺、実はあのときの俺でした」
伸一はおどけて笑った。内心の落胆を悟られたくなかった。
タクシーは橋のたもとで止まり、二人は車から降りた。つゆ美のアパートは橋の手前にあり、伸一のマンションは橋を渡った先にある。
別れ際、つゆ美は少し真剣な顔になって言った。
「こないだのことですけど、恵子さん、迷惑がってたから、あきらめた方がいいと思います」
「……わざわざご忠告ありがとう」

伸一は苦笑いでうなずく。事情を説明するのも面倒だった。
「それから、あの日のあたしは、嘘ですから。恵子さんにカニ料理のフルコースをごちそうされて、同じ会社でお世話になってるし……それで、頼まれて変身しただけですから。今日のあたしが、いつものあたしなの」
頼まれると断りきれない島根県人か、と伸一はもう一度苦笑いを浮かべた。
「心配しなくても、こないだの大胆な君は、荒木には内緒にしといてやるよ」
「……いえ、あたし、そんなつもりで……」
「でも、こないだの格好の方が荒木の好みかもな」
「ほんとですか？」
「裸で来れば、もっと喜んだかも」
冗談めかして言った。案の定、つゆ美はムッとして「失礼します！」と踵を返した。だが、伸一は嘘をついてはいない。勝利とは、そういう男なのだ。
数歩進んだところで、つゆ美は足を止め、伸一を振り向いた。
「あの……」
「なに？」
「……いいです、やっぱり……」


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb